

東寺五重塔内部の彩色塗装に関する考察

鶴岡 典慶¹

A study on the colored paintings inside the five-storied pagoda of Toji temple

Noriyoshi Tsuruoka

The Toji Five-Story Pagoda was built in 1644, and the first floor of the interior is decorated with brilliant colors, most of which are original paint. In this study, we conducted a site survey in conjunction with the construction work to prevent the paint from peeling, and consider the process by which this paint was applied.

1. はじめに

東寺は、京都市南区に所在する真言宗総本山寺院で、延暦15年（796）、平安京内に桓武天皇によって官寺として建立されたのがはじまりである。その後弘仁14年（823）に弘法大師空海が嵯峨天皇より勅賜され、寺名を教王護国寺と改めて密教寺院としての寺観が整えられていった。以後、衰退と再興を繰り返しながらも寺域を変えることなく今日まで守り継がれている。なお、寺院名称は現代においても一般的に東寺として親しまれている（以下、本稿においても寺院名称は東寺を使用する）。

東寺五重塔（図1）の建立は、寺院創建からかなり遅れて元慶7年（883）頃ようやく竣工したが、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の4度にわたる焼失と再建を繰り返し、寛永21年（1644）に再建されたのが現在の塔である。建立後の修理としては、元禄5年（1692）に心柱を約40cm切り下げる大工事が行われたほか、台風等により屋根補修を中心とした応急工事が実施されてきた。また昭和34年から同35年（1959～1960）にわたり国庫補助事業で、屋根葺替及び部分修理が行われている。



図1 国宝 教王護国寺五重塔

五重塔の初層内部は、全面にわたって極彩色が施されており、四天柱には月輪内に密教諸尊を描く両界曼荼羅、側柱には八大龍王（隅柱は宝珠に雲）、壁面の腰長押上には真言八祖、下には蓮池がそれぞれ描かれ、その他の部分も様々な絵画や文様で埋め尽くされている。本彩色は、江戸時代の建立時に施工されたものがほぼそのままの状態に残されており、建立年代が明らかな当時の彩画技法を知る上で重要な遺構で、これまでの先行研究では、輪違紋や菊紋等の連続文様の輪郭や彩色に型紙が使用されていたこと、あらかじめ木地に白色下地を引いてから彩色を施していること、塗装色を指示する墨書が描かれていること、緑色顔

¹ 本学教授

料分析結果等¹⁾が報告されている。これらの報告は、彩色模写技能者及び剥落止め工事施工者によるもので、いずれも間近でじっくり作業を行った技術専門家ならではの深い洞察力に基づくものとして貴重な報告資料である。

東寺五重塔内部彩色の修理としては、昭和34～35年（1959～1960）の屋根葺替修理時、平成22年（2010）及び平成29年～令和3年（2017～2021）にそれぞれ剥落止めの処置が施されてきた。昭和修理では水溶性樹脂（顔料浮き上がり箇所）とアクリル樹脂（岩絵の具使用箇所）の2種類を使用して、注射器による注入と表面からの噴霧塗布による処置が施されたが²⁾、平成及び令和修理では膠を中心とした処置が行われた。

剥落止め作業では、彩色部分に直接慎重に処置を施すことから各部に接近出来るように足場が設置されるため、それぞれの彩色部分を詳細に見分けることが出来る。この度の調査研究は、令和3年度の作業時に合わせて彩画技法及びその後の経過等に関する詳細調査を行ったもので、調査に当たっては赤外線カメラによる撮影を実施し、彩色下の墨描き等についても併せて実施した。



図2 五重塔内部

2. 色彩指示に関する墨書

連続文様が大規模となる場合、大勢の絵師による作業となることから、中心となる絵師により配色の指示をする必要があることは十分想定され

る。重要文化財清水寺奥院の保存修理において、組物や間斗束彩色部に「朱」（赤）、「六」（緑青）、「牟」（紫か？）の墨書が発見されており、東寺五重塔においても内法長押や腰長押から「ゑん」「ゑんし」（臙脂か）の墨書があったことが報告されている³⁾。今回の調査においても腰長押の亀甲文様（図3）に「ゑん」（図4）のほか、新たに「三と」と判読される文字が発見された（図5）。これは腰長押の亀甲文様の赤色、白色及び緑色の配色であることから、緑（緑青）を塗る指示として記されたのではないかと推定される。

なお、今回の墨書はいずれも白色部分からのみ発見された。その理由は、緑色及び赤色塗装面の塗膜が厚いためと考えられ、おそらく各箇所にも色



図3 腰長押の亀甲文様彩色の配色

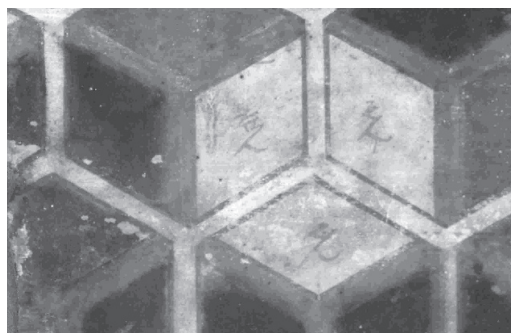


図4 腰長押の「ゑん」墨書（赤外線撮影）

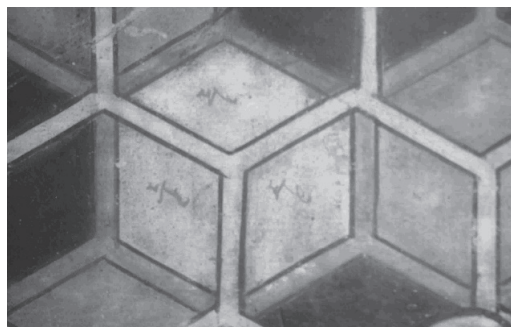


図5 同上「三と」墨書（赤外線撮影）

の指示があったであろうと推察できる。また、本来の指示通りに塗られていないことについては、どのような経緯があるのかわからない。

3. 複数の絵師による人物描画

文様彩色と異なり人物描画等の絵画では、絵師の個性が表われる。東寺五重塔内部には、真言八祖のほか四天柱を囲む天井長押の四周にそれぞれ楽器を持った天女像と迦陵頻伽像が一对で描かれている（図6-1、図6-2）。この図像は、いかにも天空を舞う如く衣をたなびかせ優雅に描かれており、また迦陵頻伽は東面が一身一頭、南面と北面は一身双頭、西面は一身三頭と変化に富んだ姿になっている。



図6-1 東面 天女像及び迦陵頻伽像



図6-2 北面 天女像及び迦陵頻伽像

さて、これらの顔の表現をよく見ると2種類あることが伺える。この特徴は目の描き方によく表れており、目の大きさ（長さ）と上瞼の形状で見分けることができる。

図7-1は、横長で上瞼が中央でやや下側に湾曲する描き方であるのに対し、図7-2は目の横幅が



図7-1 南面西側像



図7-2 北面西側像

それほど長くなく上瞼は緩い円弧状に描かれている。では、この2人が分担して描いたかというところではない。図7-2を赤外線カメラで撮影した画像が図8で、この写真をよく見ると目の形状を当初の絵から変えていることがわかるとともに、さらに鼻筋や口元も大きく描き変えている。



図8 北面西側像を赤外線撮影したもの

このような描き直しは、南面を除く3面で確認でき、東面は2体とも、西面の1体は描き直しているがもう1体は剥落して欠損のため不明、そして北面は1体は描き直すがもう1体は当初の形状を踏襲していることがわかった。これらの状況を踏まえると、当初は横長の目を描く絵師がすべての下図を描いたが、もう一人の絵師がそのうちの多くを描き直したということになる。ここで不可解なのが、南面と東面は描き方が統一しており、西面は1体が剥落して不明であるが、北面の2体の仕上げが異なることである。

東面北側像の赤外写真（図9）は、目の形状を大きく変えたことが明瞭にわかり、東面の他の1体も同様の変更跡が残る。これに対し、北面東側像の顔部分の赤外線写真（図10）の詳細を確認



図9 東面北側像の赤外線写真



図 10 北面東側像の赤外線写真

すると、下図の上からほぼ同じ位置に上描きを施しているため、この線描は横長の目を描く絵師のものとして間違いない。

ここで、壁面に大きく描かれている真言八祖像の描法を見てみると、目のラインや口元の表現は天女像等の仕上げで変更した絵師の描き方で統一されており、また下書き線と上書き線も同じ絵師によって描かれたことがわかる。

もう一度天女像に戻ると、通常であれば顔の表情は同一画面上では一体性を持たせたいと考えるが、なぜこのようにしたのか、あるいは結果としてそうってしまったのか理解しがたいが、調査結果からすると、真言八祖像と天女及び迦陵頻伽像は元々2人の絵師が分担して描くこととしていたが、真言八祖像を描く絵師が天女像の下書きを見て気に入らなかったため、仕上げ段階の途中から割り込んで描き直しを行ったのではないかと考えられる。

4. おわりに

東寺五重塔は、現存する五重塔の中で最高最大の規模を誇り、初層内部彩色面積も 400m² 超える大きさで、一般の建物であれば内外部全体の彩色量に相当する。したがって建立時には多くの絵師が携わり、それらを統率する親方絵師が作業分担を行ったが、そのような環境では親方絵師の思っていたように行かないことも多々生じたであろう。今回の調査によってその一端を知ることが出来た。

実施に当たっては、教王護国寺並びに有限会社

川面美術研究所の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

※本調査研究は、令和3年度の京都女子大学研究助成を受けて実施した。

注

- 1) 多田牧央、森正和、藤原学 2021 年 「国宝教王護国寺五重塔内部彩色の材質と技法」 日本文化財学会大会（オンライン開催）
なお、彩色模写時の調査については、山崎昭二郎「古社寺彩色文様復原模写について」1984 年（赤穂市歴史博物館編『文様彩色画師山崎昭二郎の世界：平成7年度特別展』赤穂市歴史博物館 P65 1995
- 2) 京都府教育庁文化財保護課 1960 年 「国宝教王護国寺五重塔修理工事報告書」 P10
- 3) 京都府教育委員会 2018 年 『国宝清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書 第四集（奥院）』京都府教育庁指導部文化財保護課 P72-77